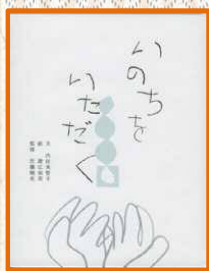


# 大好き！絵本

初瀬 恵美



『いのちをいただく』  
文：内田美智子  
絵：諸江和美  
監修：佐藤剛史  
出版社：西日本新聞社

今年度も一か月をきりました。年長さんと過ごす時間も残りわずかとなってきました。3月はそんな年長さんに向けて、「伝えたい一冊」をテーマに選びました。

遊びの中で、いろいろなことを学び、友達や家族に対する思いやりも深めてきた年長さん。でも、まだ『いのちをいただく』ということについて真剣に考えたことがほとんどありません。食べ物の好き嫌いも減り、気持ち良いくらいにおいしそうに給食を食べてくれる子ども達。食べることを楽しんでくれているのは、とても嬉しいことです。でもその一方で、心が育ってきている今こそ、この本に出会ってほしいとも思うこの頃です。

テーマは実に重く、奥深いものです。そして、この話は遠い話ではなく、熊本の食肉加工センターで働く坂本さんという方の実話をもとに書かれています。

坂本さんのお仕事は「牛を殺して、お肉にするお仕事」です。坂本さんは、ずっと、この仕事がいやでした。息子の授業参観に行ったとき、先生が一人一人お父さん、お母さんのお仕事を尋ねました。その時、息子さんは「普通の肉屋です」と答えたのでした。授業参観後息子さんは先生になんで「普通の肉屋」と言ったか尋ねられ、「カッコわるかもん」と答えました。先生は「おまえのお父さんが仕事ばせんと、肉ばたべれんとぞ。すごか仕事ぞ。」と伝えます。その日以来「お父さんの仕事はすごかとやね」と尊敬するようになりました。そんなある日、食肉加工センターに殺される予定の牛がきました。その牛に女の子がずっと話しかけています。「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ。」「みいちゃんが肉にならんとお正月がこんてじいちゃんの言わずけん。みいちゃんば売らんとみんながくらせんけん。ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ。」と言いながら一生懸命牛の腹をさすっていました。その女の子の悲しむ姿をみて、坂本さんは「この仕事はもうやめよう。できん」と思いました。でも、背中をおしてくれたのは息子さんでした。「心の無か人がしたら、牛が苦しむけん。お父さんがしてやんなっせ」そう言ってくれたのです。後日、みいちゃんを飼っていた家のおじいちゃんが食肉加工センターにやってきました。そしてみいちゃんの肉を少しもらって、帰って家で食べたことを話してくれました。「孫は泣いてたべませんでしたけど『みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるとぞ。食べてやれ。みいちゃんにありがとうと言うて食べてやらな、みいちゃんがかわいそかる？食べてやんなっせ』て言うたら、孫は泣きながら『みいちゃん、いただきます。おいしかあ、おいしかあ』て言うて、食べました。ありがとうございました」と。その話を聞いて坂本さんは、もう少し、この仕事を続けようと思いました。

・・・というお話しです。何度読んでも、涙があふれてくる本です。

私たちが日々いただいている食べ物の命の重さを考えさせられる本です。

だからこそ、この本は、ぜひ保護者の方の声でお子さんに読んでいただきたいと思います。

大好きなおうちの方の気持ちを感じ取る力が育ってきている子どもたちに、この『いのちをいただく』を読んであげてください。そして、一緒に『いのちをいただく』ことについて考えられるといいですね。

